
バンドと君と、ほかにも何か。

you

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バンドと君と、ほかにも何か。

【Nコード】

N2562V

【作者名】

you

【あらすじ】

八王子を中心に活動する、現役高校生バンド【Magnolia】。
音楽、恋愛、友情・・・
さまざまなものに悩まされる、少年少女たちを描く。

ってかつこよく言ってみたつもりですが、初投稿の作品なので・・・
色々、大目にみてやってください（笑）

イラスト&挿絵は、知り合いのカラさんが描いてくれました。

著：you

イラスト：カラ

毎週日曜 or 月曜に更新予定。

バン君：設定（キャライラストあり）

【Magnolia】

八王子を中心に活動中の、現役高校生バンド。

> i 2 8 4 6 6 — 3 6 8 4 <

【Magnolia】

メンバー

G t & V o . 館腰ひのき（たてこしひのき）

> i 2 8 4 6 7 — 3 6 8 4 <

使用ギター：フェンダージャパNSTラトキヤスター（黄色）

都立笠見高校^{かきみ}2年。ギター歴1年。能気な性格でちゃんぽらんしているが、歌唱力は確か。高校に軽音楽部がなく、バンドを組むことを諦め路上で弾き語りしていたところを、たまたま通り掛かった修に誘われて【Magnolia】に加入。
基本的に遊び好きだが練習熱心。

B a . 岩沼里乃^{いわぬまさこの}

> i 2 8 4 6 8 — 3 6 8 4 <

使用ベース：フェンダーUSAジャズベース（黒色）

指弾き、ピック弾き兼用。

私立景明学園高等部^{けいめい}1年。ベース歴3年。ひのきと修の1年後輩。

笑顔を絶やさないとつとりとした優しい少女。修が認めるほどのベ
ースの腕前だが、本人はいたって謙虚。
成績優秀容姿端麗の才女。

Dr・名取修 なとりしゅう

> i 2 8 4 6 9 — 3 6 8 4 <

使用機材：アイアンコブラツインペダル、TAMADラムスティク
はるかたい
都立遥台高校2年。ドラム歴7年。【Magnolia】のメンバ
ーのみならず知り合いのバンドの人からも‘神ドラマー’と呼ばれ
るほど、卓越したドラムテクを誇る。

週4日のバイトの間を縫って練習し、時間を無駄にせずスティク
で努力家な性格は、メンバーからはドラムテク以上に尊敬されてい
る。

【Magnolia】のリーダーで、作詞作曲やベース以外の楽器
もこなす。

バン君：設定（キャライラストあり）（後書き）

ドラムのこと、もっと勉強しなきゃ・・・by作者

ちなみに、【Magnolia】のメンバーの苗字は、全部宮城の地名から取りました。

練習後、マックにて。（前書き）

調和していく――

四畳半もないこの空間で、3人の奏でる音が――

ミキサーに野菜やら果物やらをかけてジューズにするかのように混ざり合っていくが、材料一つ一つの味はちゃんとわかる。そんな具合に。

――修くん独特とも言える、重厚なバスドラムと音抜けの良いスネアドラム、軽快なハイハットが、正確でいて生き生きと躍動するようなリズムを刻み――

――里乃ちゃんの白魚のような指先で奏でるベースが音の厚みとリズムを支え、繊細ながらも勢いよく加速していく――

そして――

――明るく軽やかな、カッティング向きの音作りに仕上げたギターサウンドを掻き鳴らしながら、俺は声を張り上げた――

俺たち――

マグノリア

Magnoliaの十八番曲、【レトロ】が、間奏を終え大サビに入っていった、土曜の朝。

現在9時25分――

練習後、マックにて。

「いやいやいや、今日は一段と息が合ってたんじゃないかい？
1年一緒にやってきた成果？ 的な？ 久しぶりに合わせて見てバリ感じたよー！」

容赦なく日本を襲う真夏の暑さにも負けずに2週間ぶりのスタジオ練習を終えた俺たち【Magnolia】のメンバー3人は、行きつけの八王子駅近くのマクドナルドで昼飯兼バンド会議を開いている。昼時のマックは大勢の客でこった返していたので、3人分の席を探すのにはかなり骨が折れたが、なんとか窓際に座席を確保し、今に至る。

現在俺の隣に座っている、ショートカットのおっとりとしたかわいらしい……いや、『超・絶・カ・ワ・イ・イ・！』女の子——マイスウィーイートツ！ エンジンジェエー——！！
こと、【Magnolia】のベーシスト、紅一点の岩沼里乃いわぬまさのちゃん——

テーブルを挟んで俺のちょうど向かい側に座っている、ムスっとした不機嫌そうな顔だが、決して怒っているわけではない——目付きは悪いが、客観的に見ても『二枚目』や『イケメン』の部類に食いつ込むだろう男——‘神ドラマー’こと【Magnolia】のリーダー名取修くんなとりしゅうを見回して、俺は今日のスタジオ練の感想を言うてみた。

「久しぶりに合わせたにしては違和感を感じなかったが、まだまだだろ。もっと修正できる箇所はたくさんある」

厳しい意見をおっしゃる、強面イケメン修くん。その静かでハスキーな声には有無を言わせないような説得力が感じられる。

「はい。【マテリアル】のBメロ——Aメロからリズムが大胆に変わることか、いつもより合ってなかった気がしますけど——
あ、でも、ひのきさんと修さんの言うとおり、そんなに悪い感じは

しませんでしたよ。テスト明けの合わせって、前はもつとぐちゃぐちゃだった気がしますし」

いつもニコニコ笑顔がマジ神！なマイルスイィィ…（以下略）――

――まあ、とにかく可愛くてしかたがない女の子、里乃ちゃんが――その顔にその声は反則だろ！――発レッドで即退場！級の穏やかで優しいなスイィィィー！トボイスを俺の隣で！……たまらん。

「そうそう！それが言いたかったのよ！さっすが里乃ちゃん！わかってるううう！」

拳を握って横にし、親指を立てる、日本でもポピュラーな「よくやった！」的なアレを里乃ちゃんに向けると、純心無垢なエンジンルスマイルで返してくれた。さすがマイル…（以下略）

「ったく…」

そんな俺達を見て、「はあ……」と、深いため息をついた修くん。

――あれ、修くん呆れてる？いやいや、修くんこう見えてツンデしだからおそろく……いや、確実に呆れられてるけど――ま、いっか。

無言でブラックコーヒーをすする修くんは無視して、俺は里乃ちゃん、この間買った、ロックバンド【オリオン】の新譜の話に話題を転換した。

練習後、マックにて。（後書き）

「りの」じゃありません、「さとの」です（笑）

〔用語集〕

・【神ドラマー】

リズム、手技、足技、音作り、パフォーマンス、すべてに秀でたドラマーを指す俗称。

修はそう言われるたび、俺などまだまだと謙遜している。

・【マイスウィイイイートツ！ エンソングエエーール！
！！】

里乃ちゃんマジ天使。

・【一発レッドで即退場！ 級の優しいなスウィイイートボイス
ス】

キャラクターボイス

CVは自分の好きな声優を当てはめてください。

・【拳を握って横にし、親指を立てる、日本でもポピュラーな「よくやった！」的なアレ】

間違っても、親指を下に向けないでください。

・【ツンデレ】

日本文化遺産の一つ。

練習後、マックにて。(2)

八王子周辺でオリジナル曲を中心に活動中！

先月6月に結成一周年を迎え、1stオリジナルアルバム(自主製作)を発表した、今もつともノリに乗ってる現役高校スリーピースロックバンド——

マクノリア
【Magnolia】!!!!

……といえば、人気絶頂抱腹絶倒ライブハウスから出演依頼で引っ張り風楽屋前には常に出待ちのファンがずらりずらり八王子でバンドをやっている人なら知らない人はいなかったら良いよねという妄想。

……まあ、現実はそのなにより上手いくわけもなく——かといって活動がマンネリになることもなく、俺から見れば『順調に』活動を継続しきている。……といえば、より前は本当のことだしね。

高校入学前の春休みからギターを始めた俺は、その3ヶ月後——つまり1年前の6月に、同い年で現在高校2年生の修くんと、1コ年下で現在高校1年生のかわいい女の子、ベースの里乃ちゃんとバンド——

【Magnolia】を結成した。

修くんは小学生からドラムを、里乃ちゃんは中学生からベースをやっていたので、当初はまったくレベルについていけなかった。

とくに修くんは、どんな素人が見てもはつきりわかるほど上手い、いわゆる‘神ドラマー’で、ベースやギター、キーボード、ついでに作詞作曲までこなすハイパーマルチ音楽野郎なのだ。

里乃ちゃんも、どうやったらこんな華奢な女の子(しかも後輩)からこんなダイナミックでウキウキする低音が奏でられるのだ！
って具合にめっちゃめっちゃ上手い。

うん。このギャップ、マジ萌える。

……だがまあ、格が違うとはいえ、これだけ上手いメンバーと1

年も一緒にやっていればそれなりに上手くなる訳で——今じゃ俺もそこそこ？　上手くなっている。（？↑これを付ける具合には、俺はまだまだねってことだけれども）

ていうかていうか、ハナっから二人は俺のギターなんかあてにしちやあいainですよね、コレが。まあ、口に出さないしアドバイスもたくさんしてくれるところが二人の良いところなんだけも。

俺が買われたのは、【歌】だった。

……これなら納得してもらえるかな？

——1年前の6月上旬、今年も猛暑到来確定だなあと予感させられていた頃。父さんからお下がりでもらったアコギを抱え、（今から考えれば）無謀にも、八王子駅前で【オリオン】の【太陽とその他】という曲を俺は弾き語りしていた。そこをたまたま通り掛かった修くんに見事俺は「スカウト」されたのだ——といえば聞こえが良いが、実際は「耳障りなギター聞かせんな」と路上に座り込んで拙いギターをさらしていた俺を一蹴し駅から遠ざかる修くんを、「歌は上手かったでしょ！そこは認めて下さいお願いしまっす！」つと内心では怒りながらも修くんの怖い見た目にびびり卑屈に頭を下げながら俺は抗議したという。

それがいわゆる、ファーストコンタクト。

うん、我ながらよく頑張った。

修くんは意外にも、俺の歌唱力は認めてくれていたようで——

「歳はいくつか？」

「ギターはいつから？」

「歌手目指してるのか？」

「バンドは組んでるのか？」

など根掘り葉掘り聞かれて、

「バンド組みたいけど学校に軽音部がなかったから諦めました！
今はシンガーソングライターを目指してます！」

と気をつけの姿勢でハキハキ答えてるうちに、なんやかんやで修くんが結成計画中のバンドにギターボーカルで加入することを承諾してしまった。

こうして、俺は晴れて【Magnolia】の一員になったのである。

——なかなか面白い出会いでしょ。

すでに決まっているというベースのメンバーが女の子だとは聞かされていなかったのも、初顔合わせのときは驚いた。

メンバーに天使がいると知ったら、世の健全な男子諸君なら誰でも驚愕し、二人を引き合わせてくれた幸運（この場合は修くん）にただただ感謝し手を合わせて拝むことだろう。実際俺はその場で拝んだ。

そして言わずもがな——天使こと岩沼里乃ちゃんに、俺は恋をした。一目で。

明らかな足手まといの俺に二人はとくに文句も言わず——オリジナル曲を中心にコピー曲もたまにやりながら、月1〜3回ペースでライブを重ね、【Magnolia】は今に至る。

【Magnolia】のオリジナル曲は、手持ちの10曲全て修くんが作ったものだ。そのうち7曲は作詞も修くん、残り3曲は俺が作詞したやつ。つまり、俺の作曲した曲はまだ1曲もないわけ——

「おっと忘れるとこだった。今日は俺が作詞作曲した曲をお二人に披露するんだったね」

俺は鞆の中からウォークマンを取り出し、はやる気持ちを抑え絡まりあったイヤフォンを解そうと指先を動かす。

——あれ？ クソ、なかなか解けないぞコレ。

「あ、そうでしたね。私楽しみにしてたんですよ？」

「うつれしーぜい！ ご期待どうもありがとう！」

やっと絡まりがとれた。さあ、ショータイムの始まりだ！

「では、さっそく聞いて下さい！ 作詞作曲館腰ひのき！ 5曲目の持ち込みでついに採用なるか！？ 全米が泣いた感動の超大作！

【生きて。でも、忘れないで】」

その時、バシャン！ と音をたて、ブラックコーヒーが修くんの手から滑り落ちた。テーブルの上に目を向けると、そこには黒い水溜まりが……

「悪い。手が滑った。店員とこ行って拭くものもらってくるわ」

ふふ、わかる。わかるぞ修くんよ。どうやら修くんはタイトルを聞いただけで、抑えることのできない高鳴る期待をほとばしらせてしまったようだな。

心なしかフラフラとした足どりで、修くんはレジへと向かっていった。1分ほど経ったあと店員さんがやってきて、テーブルを拭いてくれた後——俺はさっきの曲紹介を一字一句間違わずにリピートすると、まずは里乃ちゃんからイヤフォンを付けてもらい、感動の超大作の幕を上げた。

練習後、マックにて。(2)(後書き)

ひのきは、最初は自分をモデルにしようかと思ったけど、「歌が上手い」って設定を入れたかったので諦めました(笑)

〔用語集〕

・【オリオン】

今年でメジャーデビュー2年目を迎える、4人組ロックバンド。平成生まれの実力派というキャッチコピーでデビューした、日本ロック界期待のホープ。

【Magnolia】のメンバーは全員【オリオン】ねファンであり、【Magnolia】のバンド仲間たちの間でも流行っている。

・【生きて。でも、忘れないで】

館腰ひのき5曲目の自作曲。

不治の病にかかった彼女を懸命に支えながら、共に二人で生き抜こうとする男の気持ちを表現した曲。今回ひのきが持ち込んだのは、ひのきによるアコギ弾き語りver.であり、ドラム、ベースの構成はまだ考えていない。

・【全米が泣いた感動の超大作】

全米を泣かせる前に、メンバーを納得させましょう。

ボツだボツだ没だ。

「で、どうでした修くん？」

これはキタでしょう！ 里乃ちゃんも「この曲すごく好きです！」って大絶賛してくれたし！ けど――

修くん反応のは、ない。ムスっとした顔で腕を組み、若干俯いている。目を閉じて何かを考えているようだった。

「ひのきさん、この曲の歌詞って、もしかしてひのきさんの実体験ですか？」

「よくぞ聞いてくれました！！ 何を隠そうその歌詞は――全て俺の妄想、もとい想像に基づいて創られたのです！！」

そう、この【生きて。でも、忘れないで】は、100%フィクション。俺の豊かな想像力による産物なのだ！

「そうなんですか！ 想像でここまでストーリー性のある感動的な歌詞書けるなんて、ひのきさんすごいです」

「いやあそれほどでも。ぶっちゃけ適当にそれらしい風景思い浮かべて書いた歌詞だし。この前テレビでやってたドラマ、タイトル忘れちゃったけどあれの番宣見て、彼女が不治の病にかかって……的な曲を創ってみようかなーって思ってた。ほら、俺らってバラード曲少ないじゃん？ 本当に実力あるバンドはバラードで差がつくってどっかで聞いた気がするしねー、みたいな？」

照れた笑いを浮かべる俺を、パチパチパチとエンジェルスマイルの天使が手を叩いて祝福してくれる――

ああ、生きててよかった！

曲を創っては持ち込み、ボツにされてはまた創り……苦節5曲目！ 母さん父さん妹よ！ ……ついに俺はやったよ！ 今まで支えてくれてありがとう！！

「ボツな」

何も、聞こえなかった。

試行錯誤の末にやっとできたと思ったたらそれは深夜は冷静な判断力がなくなり後々考えるとコレはないよな。現象が生み出す哀れなガラクタでした的なことを繰り返し――1ヶ月かかり昨日ようやくできた作品なのだぞ！

それがこんな仕打ちを受けたまま……

死んでたまるか！！

執念でゾンビ化した俺は、店の窓から差し込む日光にも負けず、反撃を開始する。

「そ、そこまで言わなくてもいいじゃん！　なんていうか……良くない？　もつと直感的にさあ……なんかほら、ググってこない？」

「こねえ」

バツサリ。袈裟斬りにやられました。

ゾンビ、生誕2秒で死す。

「わ、私は来ましたよ！　ググっと！」

ゾンビ、死から2秒で蘇る。

「そう言ってくれるかい里乃ちゃん！　ありがとう！　里乃ちゃん、マ、ジ、て、ん、しっ！」

世にも珍しい、天使に感謝するゾンビが、ここにいた。

「たしかに私も気になるところはいくつかありましたけど、私たちは今までそういうのはスタジオ練で練り合わせていつて乗り越えてきたじゃないですか。今回もきつと、いけますよ」

「……いや、こいつはボツだ。練り合わせるもなにも、最初から材料が乏しい。そもそも歌詞が気に喰わん。」

ちよ、おまつ……

> i 2 8 4 7 0 — 3 6 8 4 <

いやいやいや、修くん強情すぎでしょー。一步も引く気がないじゃないかい……

「そんな……私はすごく……すごく良いと思いますけど……」

音楽に関しては俺の先に行く里乃ちゃんのさらにその先をバイクで駆け抜けている修くんの言葉に、さすがの里乃ちゃんも自信なさ気になってきた。

「ああ、悪い。俺午後からバイトあるから、もう帰るわ。じゃあな」
トレイを片付けると、修くんは足速に帰って行ってしまった…

ガッテム！！！！

ボツだボツだ没だ。(後書き)

〔用語集〕

・【難聴】

とくにドラマーのみなさんはお気をつけください。
シンバルの音とか。

・【妖刀ボツ】

名取修が所持する名刀。
本来は適切な判断にしたがって使用される。

・【ゾンビ】

これはゾンビですか？
はい、ボツ（没）後のひのきくんです。

天使と2人で。

ハンバーガーとコーヒーだけしか口にしなかった修くんとは違い、俺と里乃ちゃんはセツトメニューを選んでいたので食べ終わるにはまだ時間がかかる。修くんが帰るタイミングと一緒に帰るわけにはいかなかった。

「まったくなんなんだよ修くんはさ……。そこまで言わなくてもいいじゃないかまったくもう」

「ひのきさん、そんなに気にしないで…。修さんもきつとわかってくれますよ！二人でもっと説得してみましょ！」

「ああありがとう里乃ちゃん！ そうだね！二人で！ 説得、頑張ろうか！」

「はい！ …それはそうと、修さん、なんであんな頑なに拒んだんでしょう…。曲の良し悪し意外にも、何か訳があるんじゃないでしょうか？」

何か訳、か…。

言われてみればそうかもしれない。あんなに一方的に自分の意見を突き付けるやり方は修くんらしくないし、良し悪しを指摘することとはあれど、歌詞が気に喰わない、なんて言ったことも一度もなかった。

「もしかして……。歌詞は適当に書いたと言ったのが、気に障ったのかな？」

「そうかもしれない…。修さんの性格的に、適当っていうのは受け入れがたそうですし」

「でもでもー！ 結果的には良い歌詞になってると思わない？」

「はい。私もそう思いますよ。この歌詞けっこう気に入ったんです…。私、帰ったら修さんにメールして説得してみますね」

「ありがとう里乃ちゃん！」

里乃ちゃんはそんなに、俺が持ち込んだ曲をやりたいと思ってく

れてるんだね、グスン。

俺は心の中でしんみりと涙ぐんだ。

——よし、絶対あのムツリ頑固野郎を説得してやるぞ！

二人の方向性が修くんの説得に固まったので、とりあえずは新曲の話は置いておき——

俺と里乃ちゃんは、行きつけのスタジオが料金値上げした件や【Magnolia】と仲の良いバンド、【JOINT】が次はいっライブやるのか、などの話で盛り上がった。

気がつけば、俺は至福の時を修くん退出から1時間余りも過ごしていた。心の中の俺は彼女と会話するたびにガッツポーズをとり続けていたので、どうやら腕がお疲れのようす。

マツクを後にするとき、里乃ちゃんを楽器屋デートに誘おうと思ったのだが、「テスト前に買った小説を帰ってから読むのがすごく楽しみなんですよ」と言っていたのを思い出して自重した。

まあ、今日はそれでよししよう。

そうして午後2時頃、俺たちは帰ることになり、八王子駅へと向かうのだった。

「でも修さんって、なんだかんだ言ってもすごい人ですよね」

八王子駅の階段を昇って改札に向かいながら、俺は里乃ちゃんとの残り少ない会話を楽しんでいる。

里乃ちゃんは西八王子駅、俺はもう一つ先の高尾駅で降りるので、お別れまでの時間は——残り10分つてところかな。

最期の一秒まで、マイスウィーイトエンジエエルと幸福を噛み締めるぞ！

と意気込む俺。空回りしそうな予感がしないでもない。

「うん、そうだよなあ。いくら小学生からドラムやってたとしても、あそこまで上手くならないっしょ。まさに‘神ドラマー’の称号にふさわしい！それに他の楽器も万能で、作曲もできて——あれが天才ってやつなんだろうなあ」

「はい。もちろん才能もあると思うんですが——私、修さんには何か強い「意志」みたいなものを感じるんです。ドラムやバンドが好きってだけじゃなくて、絶対、何がなんでも、命懸けで、というか——す、すみません。上手く言えなくて」

強い「意志」、か……

言われてみれば、そうかもしれないな——

「ああそれ、わかるわかる。スタ練のときの修くん、目力強すぎて怖いくらいだもんね。ライブのときとか、終わったら死んでもいいってくらいの気合いを感じるもん」

「そうですよね」

里乃ちゃんは少しだけおかしように、ニコニコ笑っている。何度見てもその笑顔には癒されるんだよなあ。

「恐すぎて、でも——逆に安心感を感じるというか。男らしくて頼もしいですよ、修さん。多くを語らずに背中では引っぱ張っていく感じとか、特に」

むむむむ？ 何やら不穏な空気だぞ？

……もしや里乃ちゃん、その発言からして——

修くんは惚の字！？

……これはスルーできない緊急事態！ エマージエンシー！
すぐさま修くんの評価が下げるようなことを言わなければ——

……思いつかねえ！ だって修くん良い男だもの！ 俺から見ても！ 里乃ちゃんの言う通りだもの！

「？ 修さん？ どうかしました？」

失恋の予感に胸を押さえて苦しんでいた俺を見て、怪訝な顔をする里乃ちゃん。無理もない。自分でやっというアレだけど、今の俺はものすごく変、まさに変人そのものだったのだから。

「い、いやあ… ななな、何でもないよ？ 別に」

かろうじて笑顔。顔面が微妙に引き攣っていたのは、スルーの方向でよろしく。

「そうですか……。あ、修さんなんですけど、やっぱりひのきさんと相性良いですよね？」

「はい？ 相性？」

改札を通ろうとしていた俺は、予想外の里乃ちゃんの発言に思わずSuica入りの財布を落として自分で踏ん付けてしまった。

そんな間抜けな俺を華麗にスルーして、里乃ちゃんは続ける。

「はい。寡黙でちょっと怖い修さんと、陽気で明るいひのきさん。

お互いがお互いの良いところを引き立てている、そんな感じがします」

——引き立てている！？ お互いに！？

呆気にとられて改札の前で固まっていた俺だが、里乃ちゃんに「後ろから人来てますよ」と教えられ、慌てて改札を通るのだった。

天使と2人で。（後書き）

〔用語集〕

・【JOINT】

八王子を中心に活躍する、4人組み高校生ロックバンド。

【Magnolia】と仲が良く、何回か共演している。

・【ガッツポーズ】

ひのきのガッツポーズは、みなさんのご想像におまかせします。
自分が想像出来るだけ派手なポーズを想像してみてください。

——— そんなものは、ひのきのガッツポーズの前では地味すぎて霞みます。ひのきのガッツポーズは、そんなレベルです。

天使と2人で (2)

「うーむ。里乃ちゃん。なかなか面白いこと言うねえ」

高尾方面行きの電車に乗るべく、俺達は3番線ホームの階段を降りている。

「はい。普段は修さんがひのきさんの師匠みたいな感じですけど」
はい、ぶっちゃけそうです。

「でも修さん、よく言ってますよ。ひのきさんの才能は俺以上だ、うらやましいって」

「ほえ!？」

——っ!？」

思わず間抜けなりアクションをとってしまったじゃないかいつ。

……修が？ 俺のことを？

「いやいや」。冗談はやめてくださいよ里乃ちゃん。俺が修くんより才能ある世界とか、パラレルワールド探し回っても見つからないからね」

そうそう。そんなの本当なわけがないって。

「冗談じゃありませんよ」

いつも通りの笑顔——

だが少しだけいつもよりハッキリした語気で、里乃ちゃんは俺の顔を見てそう言った。

「初めてひのきさんの歌を聞いたとき、こいつは大物になる、そう思ったらいいですよ。その分、ギターが許せなかったらしいですけど」

「すいまっせーん！ ギター初心者であんな無謀なことしちゃったとかもはや黒歴史っす」

「でも、ひのきさんはギターもどんどん上手くなって。ひのきさんがいないときとか、よく褒めてますよ」

「え!？ マジで!？」

「本当ですよ。10教えたら15くらいになるまで練習してくる、意外に努力家だ、とも。本人に言うとすぐ調子に乗るから、言うなっって言われますけど」

「ごもつともです」

まさか修くんがそんな風に思ってくれていたなんて…

普段は厳しめの言葉が多いだけに、なんかこう…

心に、きちまったよ。

「私も、ひのきさんの歌とギター、大好きですよ」

その台詞にタイミングを合わせるように、ガタンゴトン音をならして3番線に列車が来た。

「え、す、すき!？」

「はい。大好きです」

(俺の歌とギターが)大好きです大好きです大好きです大好きです……

ちょ、え、ナニコレ幻聴? 俺の許容範囲を大幅に越える台詞が

……

——冷静になれ、俺よ。コレは幻聴ではない。里乃ちゃんが現実
に放った言葉なのだからな。

つまり——

喜んでオーケー!!

やべえ俺、今死んでも悔いがないかも!

天にも昇るような気持ちで、俺は電車に乗り込んだ。

車内は思ったより空いていた。この車両には人が4人ほど見える
だけだ。先に俺が座席に座り、続いて里乃ちゃんが……

そして、気付く。

ガラガラに空いている車両だったのに、里乃ちゃんは……

俺の、真隣に……

ほぼ、ゼロ距離で……

——ま、まじで?

ドキン、ドキン——心臓が派手にビートを刻む。

多分向こうは意識とかしてないんだろうし、客観的に見れば「それがどうした？ 何勘違いしてんの？ コイツ痛いわー」と嘲笑されるレベルの、些細なことだろう。しかし俺は、さっきの里乃ちゃんの発言もあり余計にドギマギしてしまう。

「い、いやー里乃ちゃん、さっきのありがたいお言葉、どうもっす……」

こ、言葉が続かない……

せっかくあんなに褒めてもらっただろ！ もっとほら……言うことあるだろ、俺よ！

ちょ、どうしよう――

「ひのきさん」

「ハ、ハイ！」

思わずかしこまってしまった。背筋がピンツと伸びる。

「さっきも言った通りですよ。ひのきさんのこと、頼りにしていますから」

頼りにしていますから頼りにしていますから頼りにし………

「お、お、俺でよければ……い、いつでも！ 頼ってくれてOKです！」

「じゃあ、そうしますね」

辛うじてたどたどしい言葉を搾り出した俺に、ニッコリと微笑む里乃ちゃん。電車の窓から差し込む光が、彼女の可憐さをよりいっそう際立てていた。

だからその笑顔……は、は、反則！ 一発レッドなんだって！

何のジャッジの権限も持っていない俺が心の中で退場勧告を出しているとも知らず、里乃ちゃんは話を続ける。もちろん、笑顔で。

「もし、今日ひのきさんが聞かせてくれた新曲が【Magnolia】でできなくても……

ひのきさんなら、また良い曲作れますよ。だから、頑張っ……いえ、一緒に、頑張らましようー！」

いつの間にか、電車は西八王子駅に着いていた。車掌のアナウンスなど一切耳に入って来ていない。

時間が経った感覚が皆無だ。楽しい時間は早く過ぎるというが今回は、実際に経った時間と体感時間の比が、過去最高に体感時間のほうが少なかった。

「それじゃあ、私はここで。さようなら」

「う、うん…また…ね…」

嬉しすぎて逆に素直に笑えない。

俺は引き攣った笑顔で彼女に手を振っていた。

そして――

風呂上がり、自宅のベットなう。

……納得いかん!!

なんでなんでなんで

【生きて。でも、忘れないで】がボツなのだ!!

これは由々しき事態であるぞ!

俺は理不尽に堪えるためにストレス発散のはけ口として、ベットの上の枕をバンバン叩いたが、現在夜の11時半。隣の部屋で寝ているであろう妹の存在を思い出し、直ぐさまこの騒音生産活動を止めた。

そしてベットの上に仰向けになり、ケータイのメール画面を見つめ、「はあ…」と深く溜め息をつくのだった。

あれから里乃ちゃんは説得メールを送ってくれたらしく、バイトで夜遅くまで働いていた修くんから返事が帰ってきたのは午後10時だという。ちなみに俺も修くんにもメールを送ったのだが、返事は

まだこない。なんでやねん。

そして里乃ちゃんに返ってきたというメールの、気になる内容は――
「すまん、あの時は熱くなりすぎたし言い過ぎた。……申し訳ないが、あの曲だけはやりたくねえんだ。ひのきにも頭下げて謝るわ。そんじゃあな」

という文面らしい。

――こいつはおかしい。

第六感つてやつがあまり発達してないと思われる俺だが、今回はかりはこの予感的中しそうだ。修くんには、‘何か’ある。ハイパー音楽野郎の修くんが、いつもの確なアドバイスをくれる修くんが――

同じバンドのメンバーが創ってきた曲に対して、感情だけでこんなに反対するわけがない。

修くんは音楽の多様性――よくバンド仲間に見られる、

『Jポップなんかカスだ』

『V系は気に入らないんだよね』

『何を言うか！ 安直なロックバンドこそ日本の音楽シーンをダメにしているんだ』

など、自分が好きなジャンル以外に対する排他的な考えを持たず、そのジャンルやいろいろなアーティストそれぞれの良いところを認める、簡単に言えば音楽に対して懐の深い人で、今まで作曲した曲も、俺や里乃ちゃんの見解、ポップな曲創ってとか激しめのメタル調でとかジャジイな曲よろしく、とかを満遍なく取り入れて創ってくれた。

そんな修くんが、「どうしてもやりたくない」などと言い出すのは、やはり腑に落ちない――

今までボツにした曲は、曲の構成的に未熟さが目立つものばかりで、今回はそれを反省し本やネットで作曲の勉強を重ねてから創ったのだ。それでも修くんから見ればおかしいところもあるだろうが、

里乃ちゃんの言つとおり充分許容範囲だ——と思う。
とすると——

天使と2人で (2) (後書き)

〔用語集〕

・【パラレルワールド】

現在いる世界から分岐した、平行世界。
パラレルワールドにはもっと成功している自分がいるはずさ、とは、自分を慰めるセリフとしてよく使われる。

・【黒歴史】

あんな過去、消してしまいたい・・・
恥ずかしい・・・忘れない・・・

・【天然】

里乃ちゃんは天然である。天然はときとして、人を喜ばせるが、ときとしてもっとも残酷に人を傷つける——かどうかは不明。

風呂上りの衝撃。

とすると――

歌詞、かな。

あの歌詞の何がいけなかったのか……

修くんの心情を推測し、コミカルに思い浮かべてみよう――

悲劇のヒロイン風に

「あんな素晴らしい歌詞聞いて感動してたのに！ 実はドラマの番宣見て適当に思い付いて書いただなんて！ ひのきのバカ！ 修くんマジがっかり！」

……キモっ！自分で思い浮かべておいてなんだが、修くんキモっ！
まあ、こんなアホな妄想はともかく――

修くんがこんな風に考えていても、おかしくはないかもしれない。
あくまで、俺の歌詞に感動していたこと前提だけれども。

俺はケータイを折り畳むと、目薬を差して目を閉じた。リラック
スしたいときによくやる習慣だ。

……？

ふと、俺の脳裏に――

修くんの俯き顔が、過ぎった。あれはたしか…新曲を聞いた直後、
だったな。

あの時点ではまだ、歌詞の真相は知らないはずで…

あの俯き顔が、奥歯に何か引っ掛かったときのように、取れそう
で取れない。

もう少しよく考えてみるか――

『歌詞が気に喰わねえ』

修くんはたしかそう言ってたな。無理矢理感動を誘うとしてる、
とも。

もしかして――

適当に創ったからとか関係なく、歌詞の内容そのものに問題が…
そのとき、俺のケータイから【オリオン】の新曲、【テンペスト】
が流れ始めた。

要は、メール受信完了のお知らせだ。

まだ直接返事のメールをもらってない修くんではなく、里乃ちゃんかな？ とか期待してしまうのが、悲しいかな片思いの男の性なんです。致し方ない。

さて差出人は――

……修くんでした。

「今から電話していいか？」

メールにはそう書いてあった。

電話？ こんな遅くに？

不思議に思った俺だが、断る理由もない。すぐさま了解の返事を送った。

そして30秒程たった後、修くんから電話がきた。

「悪いな、こんな遅くに」

「だーいじょうぶだよ修くん！ で、なんか話したいことあるんですよ？」

電話越しじゃあまりわからないが、修くんの声は心なしか少し沈んで聞こえた。

「ああ。お前が持ってきた新曲のことなんだが…」

来たか、例の話。よーし！ 納得のいく説明聞かせてもらうぞー！
「あの歌詞、俺が実際に体験したことにそっくりなんだよ」

耳に届いたのは余りにも予想外な言葉。無意識に息が止まり、なんのリアクションもできなかった。数秒後――

「ちょ、修くんそれマジい？ え、えーっと… 詳しくお聞かせ、願えますか？」

やっとのことで返事を搾り出した。少し震えていたかもしれぬ。
「冗談でしょ？ などとは思わなかった。修くんは冗談をあまり言

わないし、電話越しにも伝わってくる真剣な声色だったからだ。

「俺が12月に、しばらく練習出れなくなるって言ったの覚えてるか？」

「ああ、アレね。モチのロンだよ。それがいい……」

修くんは、去年の12月に、しばらく、春ぐらいまでになると思うが、スタジオ練習の回数を減らして欲しいと言われた。もしそれがダメなら、代わりのメンバーはちゃんと見つかるから俺をクビにしてくれ、とも言われた。

事情を聞かれたくない雰囲気だったので、俺も里乃ちゃんも詳しくは聞かなかったし、修くんがいない【Magnolia】なんて考えられない——

何より俺は修くんどうしても一緒にやっていきたくったので、修くんが元に戻るのを待つことにした。

修くんは音楽関連以外の自分のことをあまり話さない人なので——

あくまで想像だが、家庭の事情が何かがあったのだと思っている。それも、財政的な。

修くんはたくさんバイトしているのに必要最低限のお金を使っているところしか見たことがない。かと言って、音楽機材にそれほどお金をかけている様子もない。おそらくバイトで稼いだお金は貯めているか家計に使っているのだろう。

何らかの理由で家計が春になるまで厳しくなってしまった。だから、修くんはバイトの時間を増やした——

なんてのは、やっぱり俺の想像の範囲を出ないけれども。

結局、スタジオ練は月に1、2回しかやらなかったし、ライブも行わなかったが、3月からは元通りになった。

——その話がなんで今再び出て来るのか……

俺にはまったく読めない。

「あの頃、俺には——大切な——女がいたんだ。とても、大切な——」

…女！？　嘘、修くんに？

浮いた話をまったく聞かない修くんだけに、何を言ってるのか理解するのに数秒かった。理解しても、急転する話の流れについていけない。

「修くん、それどーゆー…」

「お前になら、聞かせてやってもいい話だ」

修くんはそう呟いて、「あの頃」の話を始めた。

本当は誰かに聞いて欲しい。そういう話し方だと、俺には思えた。

風呂上りの衝撃。(2)

修くんには、付き合っていた彼女がいた。

その彼女は、病気を抱えていた。

修くんは、その彼女を懸命に支えながら生きていた。

その人は、病状が悪化して去年の12月に入院することになった。

そして春を迎える間もなくに、帰らぬ人となった。

『生きて。でも、忘れないで』

それが、彼女が病床で修くんに言った最期の言葉だったという――

……以上が、俺が電話で修くんから聞かされた話の概要なのだが

――俺は何も知らなかったんだ。

ただ、適当に歌詞を書き上げたただけなのに……

それが、こんなに身近な人の――

同じバンドのメンバーの、悲しい思い出をなぞるような歌詞にな
っていたなんて――

頭が混乱する。わけがわからない。

こんな偶然ありえるのかよ。信じられねえ。

修くんは嘘をついた？

いやそんなはずはない。あれが作り話だなんて思えない。何より

修くんがあんな嘘をつく理由なんてない。

——そうか。

現実にあったこと、なのか……

音楽と科学と。

「学校って、授業を受けたという事実を作るためだけに行ってるよ
うなもんだよね。」

熱を帯びたアスファルトが、非常に暑苦しい。

道路沿いの歩道の上で、使い古しの団扇を煽りながら嘆く。けだ
るくてしかたのない、学校からの帰り道。

帰宅部の俺は下校する時間が早いので、今はまだ午後4時になる
かならないかの時刻だ。

俺は【Magnolia】の十八番曲、【レトロ】を口ずさみな
がら、高尾駅から自宅へと向かっている。自然と速足になっていた
が、構わなかった。気持ちを落ち着けようとしても、上手くいかな
い。

「ギター、弾きてえな」

—— やっぱ、コレしかないっしょ。

気持ちが落ち着かないときは、ギターを何時間でも掻き鳴らすの
に限る。そうやって精神統一するのが、マイスタングードスタイル
だ。

「ギターは友達とか、ホント俺にぴったりの言葉だよなあ」

まるで聞き上手の友達に、ひたすら愚痴をこぼさせてもらえるよ
うな、そんな感じがするからさ。

昨日の夜中の修くんからの電話は、衝撃的過ぎた。俺は、上手く
応えられたのだろうか……

俺は、謝った。軽い気持ちであんな歌作っちゃって、ごめん、と。
修くんは、気にするなと言ってくれた。こっちこそ、夜中にいきな
りこんな話始めて、すまねえ、とも。

「別にお前のことをどうこう思ってるとか、んなことはまったくね
え。ただ……俺がああ曲やりたくないって理由……わかってくれ」

そんな事情知っちゃったら、あの曲演奏する覚悟なんて持てないって……

あんな……半端な気持ちで作った歌詞を聞く度に、修くんが悲しい過去を思い出すのかと思うと……

「【Magnolia】でやるうなんて、言えるかったの」

横断歩道を、落ちてた小石を蹴りながら進んだ。

「コロコロ転がる石、コロコロ転がる意志……」

最近歌詞を書くのに熱心だったせいか——とくに意味なんて考えてない、とりあえず韻を踏んでみただけの独り言が、自然と口をつく。

そのとき、前方俺のすぐ近くに、人影が見えた。こっちへ歩いてきているようだ。

——うわ、やべっ、独り言してたの聞こえちゃったかな？

少し恥ずかしい気持ちになったので小石を蹴るのは止め、地面を向いたまま歩こうとすると——

「それは、石と意志がかかっているのかな？」

——っ！？ 何だいきなり？

突然目の前から、俺の独り言（韻踏みバージョン）に対して質問を挟んでくる声がした。顔を上げると、2メートルほど先から——

「昭敏！昭敏じゃん！！」

ふちなし眼鏡をぶら下げた、見るからにこいつ理系じゃん、研究者じゃん、といった顔。今まさに着ている高校の制服よりも、白衣のほうがよっぽど似合いそうな外見をしている。

そんな俺の幼なじみ、あおばあきとし青葉昭敏が——

知的な表情の上に微かな笑みを浮かべ、俺のいるほうへと歩いてきていた。

「すぐ近くに住んでるっていうのに、久しぶりだよな〜！ 元気してた？」

「ああ。君こそ、相変わらずのようだな。」

昭敏も、学校が終わり高尾駅から家に帰っていた途中らしく、またま俺の姿を見つけたからわざわざ俺の方へやってきたのだという。今日は部活が休みなので帰りが早かったらしい。俺と昭敏は家が近いので、自然と二人で並んで帰ることになった。

青葉昭敏、高校2年生。同じ町内にすんでいることもあって、小学校に上がる前からの付き合いだ。中学校まで一緒だったのだが、高校は別。

昭敏は、まあ見た目通りなんだが——頭が良い。それも洒落にならないレベル。数学オリンピックか何かで優勝したこともあるとかマジバないっす。

そんな昭敏だが、中学校の頃は俺と一緒にバスケット部に所属していた。実力的には俺の方が上だったかな。けども、昭敏の建てる作戦や、冷静な判断力、適切なアドバイスなどは、もはや神。チームの参謀役として大活躍だった。

昭敏の中学校生活といえば、「勉強」「実験」「バスケ」の三本柱で、しかもどれもがっしりと太い。小学校の頃はゲームなどもし一緒に遊んだっけな。だけど、中学に上がる頃にはほぼ先の三つしかしていなかったんじゃないか？ 二人で遊んだ記憶といえば、中学校以降のだと、昭敏の実験——ペットボトルロケットの噴水で虹を作るとか、混ぜるな危険の洗剤を混ぜて最強の洗剤を作るとかいう狂気の沙汰としか思えないこと——に付き合い合わせたことぐらいしか思い浮かばない。

まあ、俺と昭敏はお互い上手く付き合ってたわけ、豊島中とよしまバスケ部の二枚看板と呼ばれちゃう程の名（？）コンビになっていたわけなんだけど——

「昭敏、最近バスケやったかい？」

「春休みに豊中の部活行つて以来、やってないな。何分部活が忙し過ぎるものでね」

「俺も春休み以来やってないなあ。あ、この前またスラムダンクを全巻読んだけどね」

「そいつは羨ましい。あれは名作中の名作だからな。もつとも、他のマンガはあまり読んだことはないけどね」

俺も昭敏も、バスケは中学校で辞めた。俺はミュージシャンの道へ、昭敏は科学者の道へとそれぞれの歩を進めた。昭敏は、里乃ちやんも通っている「景明学園」の、理化学研究部とやらに所属していて、毎日実験やらレポートやらで忙しいらしい。「大学かよ！」
つて突っ込みたいけど、高校。高校の部活でここまでするなんて――
――さすがは、超難関進学校ですな。

「そうそう、ひのきは、バンドのほうは順調なのかい？あれからライブ見に行けなくてすまなかったな」

昭敏は去年の夏休み、【Magnolia】のライブに初めて来てくれた。もつともそのころは――

まあ、ご了承ください（笑）何分、素人だったもので（俺が）。
そしてどんなライブだったのかというと……

――ああ思い出したいくない！！あんなBAD BAD B
AD！な俺のギター……

Aメロの時にBメロのギター弾いちゃうとか、ホントなにやってんですかー！演奏中にピック落とすし、ギターのストラップが外れてギター落つこととして足の小指直撃するし他にも……

とにかく！あのライブの記憶を持つ者をそのままにしておくわけにはいかねーなあいかねーよ。

「ちょおつと待ったあー！んん？あれ？あれからつていつ以来？ユーはまだ僕のバンドのライブには来てないはずだよお？実験のし過ぎで疲れてるんじゃないのかなあ？」

俺はわざと大仰にポーズを決めながら、過去を改変するべく立ち

回る。

「ふ、そうだったな。あのライブは、僕は見ていなかったことになっているんだよな。君の中では」

「まあまあまあ、待ちたまえあーきとしくん。俺のライブを、まだ見てない、君へ——」

俺は通学鞆のサイドポケットから、黄色で縦長の、10枚程の紙の束を取り出し、昭敏の目の前に突き出し、続けた。

「ライブチケットという名の、天国への片道切符を差し上げようではないか！」

片道だと帰ってこれないか？ と冷静に突っ込むメガネは無視し、俺は「Magnolia」が今度出演する予定のライブについて説明を始めた。

音楽と科学と。（後書き）

〔用語集〕

・【マイスタンダードスタイル】
たまにギターに向かって話しかけてしまつのも、マイスタンダードスタイル。

・【青葉昭敏】
私立景明学園高等部2年。いわゆる科学オタクで、三度の飯より実験が好き。

以外にも運動神経は良く、中学時代はバスケット部のレギュラーとして部の都大会出場に貢献した。

現在は、世界を変えるほどの発明をするべく科学者の道を爆走中。成績は学年トップクラスであるらしい。

音楽は、意外にも80～90年代のハードロックを聴くことがあるという。父親の影響によるらしい。

音楽と科学と。(2)

「再来週の月曜日！ 八王子LINERで行われる高校生限定ライブに、我らが【Magnolia】は午後7時半から出演だ！ チケット代はなななんと、特別特価で500円！ 当日ドリンク代としてももう500円かかりますが、これはお得！ 行かなきゃ損！ 人生の32%ぐらいは損しちゃうよ？」

俺は畳み掛けるようにライブの宣伝文句を歌い上げ、昭敏の顔を横目でちらりと見た。

八王子駅から徒歩5分くらいの場所に、八王子LINERというライブハウスがある。俺たち【Magnolia】の知り合い、【ウルトラサンダーマウンテン】という厨二臭がプンプンするネーミングのバンドが、そこで今回のライブを主催する。

再来週だとたいいていの学校は夏休みに入っているので、普段より集客が望めそうな気がしている。

高校生バンド限定の出演、いわゆる高校生限定ライブなので、出演者は全員高校生だ。こういうライブは何回も出演してるから、おかげで高校生のバンド友達はたくさんできた。

高校生ならではの盛り上がりつついうか、演奏はイマイチでも、観客もバンドもノリがすごく良いので、やっていてすごい楽しいライブなんだよなあ。

昭敏が来たあの暗黒黒歴史ライブも、高校生限定ライブだったっけな。

——あのライブから何度もメールで誘ってるのだが、あれからライブに来てもらっていない。今回も内心では望み薄だろうと思っていたが…

「なるほど。良いだろう。その日は空いているし、君のギターがどれほど上手くなったのか興味がある。そのチケット、買おうじゃない

いか」

予想外の展開、まさかのチケット購入発言が飛び出した。

「——っ！？マジで！？昭敏キタ　！！　やった！

マジサンキュー、昭敏！」

マジかよ！あのがり勉理科系実験大好きオタクがライブ観に来るとか、超レアじゃん！ナニコレ？世界秩序の崩壊！？……いや、そこまでは言わないか。前に一回来てくれた訳だし。でもまさか、昭敏が来てくれるなんて——

素直に、うれしい。向こうもおそらく思ってくれているだろうが

親友、だからな。

そのとき、昭敏の顔が少し寂しそうになったかに見えた。

「ひのきも、すっかりバンドマンになったみたいだな。お互い、バスケに熱中していた頃が懐かしい……」

遠くを見るような顔で、昔を懐かしみ始めた昭敏に、俺も興奮を一時中断して同調する。

「ああ、そうだな……。昭敏はともかく、俺は自分がバスケやめてバンドやつてるなんて想像してなかったし」

小さい頃から、『科学者になって世界を変える発明をするのが夢だ』と言っていた昭敏とは違い、当時の俺はバスケ一筋だった。もうホント、バカみたいに毎日バスケ三昧で……。

NBAでプレイするのが夢だった、小学生時代。現実が徐々に夢を蝕み始め、NBAでプレイすることなど夢のまた夢だと理解し始めたが、それでも、朝から晩までバスケのことを考えていた、中学生時代——

高校でもバスケを続けることを、諦めなければならなくなった、中学生時代——

口の中に、血の味が広がる。無意識に、唇をギュツと噛んでいたみたいだな。

「済まない。辛いことを思い出させたのなら、謝る」

気付いたときには、遅かった。昭敏が申し訳なさそうな顔で呟いていた。

…… ああしまった。思わずブルー入っちゃったなあ。

俺は気まずい空気なんて大っ嫌いさ。ここは、笑って通り抜けなきゃね。

俺は努めて明るく振る舞い、チケットを一枚、昭敏の前でひらひらとちらつかせた。

「いやいやいや、全然、だーいじょうぶだって。あ、それよりさあ、ほら、来てくれるんならチケット買ってつてよ！」

「ああ、そうだったな。じゃあ、買わせて頂こう。」

昭敏は財布から500円玉を出し、俺のチケットと交換した。

「そうそう、昭敏の方こそ、部活は順調かい？ 将来、自分の発明で世界を変える予定なんだろう？」

「もちろんさ。部活は至極充実しているし、夢に向かって着実に進歩している……はずさ」

最後は少し自嘲気味に笑った昭敏。やっぱり、世界を変える発明への道は平坦なものじゃないんだな。

「そうか…… よかったじゃんか。さすがは昭敏だな。俺は…… なかなか上手くはいつてないかな」

里乃ちゃんに、俺の歌とギターを好きだと言ってもらえた。修くんも俺のことを褒めていたのだと、教えてもらった。そうして、自分の成長を実感できたと思った矢先に……。

まったく、俺はまだまだ未熟者だよな。心に訴えかけるような曲を創ろうと思ったのに、その歌詞を適当に書くなんて、そんな歌詞を歌った曲に陶醉するなんてさ――

「ゴクリ」と、血と一緒に唾を飲み込んだ。

「なあ、昭敏」

突然、頭に浮かんだ質問。

「なんだい？」

昭敏なら、良い答えを聞かせてくれる、そんな気がした。

「音楽で、世界を変えられると思うか？」

自分の現状を変えたくて、答えを知れば変わる気がして
人によっては、そんなのチープな考えだと馬鹿にされそうな質問
を、昭敏にぶつけてみた。

「面白い質問だ。だが……もうそろそろ、お別れのようなだ」

「あ……」

気がつくのと、俺と昭敏の帰路の分かれ道である十字路に差し掛か
っていた。俺は真つすぐ、昭敏は左に曲がると家に着く。

「結論だけ言うと、音楽は世界を変えられる。そう思うね」

「へー。意外だな。昭敏がそう言うなんて」

「歴史的な事実に基づいて言っているだけさ。古来から人は、音楽
と密接に関係しているからね。世界を変える例としては……反戦の
歌が世界中で大ヒットを記録すれば、世論も自ずとそうなるんじや
ないか？ そうなれば、戦争だらけのこの世界に少なからず変化を
もたらしたことになる。そうは思わないかい？」

……なるほど。たしかに、そいつは十分現実に取りうる話だ。
というより、実際にあった気もする。

今の所大胆に変わったかは知らないが、その時の人々は多少なり
とも、平和について考えたはずだ。

「そうだよな。音楽は、世界を変えられる。サンキュー、ハカセ」

「どういたしまして、ヒノキオ」

お互い小学校時代のあだ名で呼び合って、俺たちは別れた。

音楽と科学と。(2)(後書き)

〔用語集〕

・【八王子LINER】

八王子駅近郊にあるライブハウス。ステージの広さがウリだが、楽屋にカサカサと動き回る黒い生命体・通称【G】が出没することでも有名。【Magnolia】のメンバーは出演者としても来場者としても常連。

ギターとメールと。(前書き)

めい いっぱい叫んだ
裏切られた気がして

俺から世界を
嫌ったくせに

【レトロ】1番サビより

ギターとメールと。

家に着くと、真っ先にギターを弾き始めた。物置き同然だった地下室を改装して作られた音楽練習専用部屋で、【Magnoia】の曲……【マテリアル】【crazy world】そして【レトロ】を、歪んだエレキギターに乗せてノンストップで歌い上げる。演奏している瞬間だけ、俺は無我の境地に突入……

厨二設定です、ハイ。

——まあ、極度の集中状態になれるってことで、わかって頂けるかな？

歌詞の情景が脳内でフルカラーで再生されていき、冷静さを保ちながらも気分が激しく高揚していく。クールにアツく、そんな状態に。

「ふー！ 終わったあー！」

3曲完唱したから、一先ず休憩。やっぱギター弾きながら歌うのって、最高に気持ちがいいよね。

俺はギターをスタンドに立て掛け、床に仰向けに大の字にねっころがった。ほてった体に、ひんやりとしたフローリングの感触が心地良い。

——音楽は世界を変えられる。

ただし……俺にできるかなんて、わからない。それに、変えようだなんて思ったこともなかった。

昭敏は、世界を変える発明をするのが夢だと言っていた。発明が世界を変えるなら、音楽でも世界を変えることができるのだろうか。あのとき、ふいにそう思った。

修くんの悲しい過去を聞かされ、俺は知らなかったとはいえ——その過去をなぞるような歌詞を、書いてしまった。

今日の帰り道、昭敏との会話で中学時代の辛い過去を思いだし、唇を噛み切るほど悔しくなってしまった。

ふわふわとしたドス黒い真綿に、心臓を直接じわじわと締め付けられるような感覚がする。じっとしていたら、鼓動が止まってしまふ。何かやらかしたい。どうせなら、何か……

音楽で世界を変える。

それくらいの、でかいことを。

しかし、バンドに5曲持ち込んで1曲も採用されてないという、甘くない現状がある。

そもそも、歌はともかくギターの腕なんてお粗末なものだし……

「ああもう！ また、もやもやしてきちゃったじゃん！」

俺は、何のために音楽をやっているのか。何が楽しくてギター弾いたり歌ったりしているのだろうか。わからないが、音を奏でたいという欲求だけはどんどん膨らんでいく。

「まあ、四の五の言わずに練習あるのみ！ やるときはやる、遊ぶときは遊ぶ、それが人生！ アーユーオーケー？」

隣に誰かいるわけでもないが、とりあえず疑問形。自分で自分を奮い立たせ、ガバッと床から起き上がる。まあ、自分に問い掛けてるってことで、アーユーオーケー？

「よし今度は……コピー曲を弾くことにしようかなって」

俺は再びギターを持って、最近練習中の曲、【オリオン】の【トライアングル】に取り組むことにした。この曲はギターボーカルパートではなくリードギターパートを練習しているので、ギターをひたすら掻き鳴らすことになる。

黄色のフェンダージャパンストラトキャスターを、肩に掛けた。

ピックを人差し指と親指の間に挟み、ギター本体のボリウムつまみを右に回し音量を最大にする。

——とりあえず、原曲流さないで一回弾いてみるか。

呼吸を整えてイチ、二、サンツ——

ピックを弦へと引き下ろす。

さあ、【トライアングル】の始まりだ——

——ひゃっほう！　今俺、輝いてんじゃね？　カッコイイんじゃない？

【トライアングル】の情熱的なギターソロが終わり、ますますノってきた。

気分はさながら、【オリオン】のギタリスト、川内サノスケ。跳びはねたり、頭降ったり、ギター振り回したり……。

決して広くはないこの部屋を、縦横無尽に駆け回る。

そして大サビが終り、一旦落ち着こうと思った矢先——

「ちょ、おまつ、うわー！！」

ズコーンッ！！

ギターとアンプを繋ぐシールドに脚を引っ掛けて、ド派手に転倒してしまった。

——あつぶねー。後ろ向きに倒れたのがせめてもの救いだっただぜ。

ギターの神様ありがとう！　お陰で僕のギターは救われました！　前向きに倒れていたら、床におもいきりギターぶつけていたからね。

帰宅してからの時間はほとんどギターと歌の練習に費やされたので、夕飯を食べて風呂を済ませると、俺の部屋の時計はすでに11

時を回っていた。

練習場所がいくら地下だといっても、防音設備はそれほど良くない。午後7時を過ぎたら歌をフル音量で歌うのはやめ、ギターはアンプにヘッドフォンを繋いで練習するようにしている。

そして、近所迷惑と家族迷惑と肉体疲労を考慮し、今日はもう寝るべく寝支度を済ませてベッドの上に横になったのだが……

「メールしたい！ 里乃ちゃんに！」

——あの病気がまた、発病しちゃった。

最初の発作から1年、治るどころか悪化してませんか？ ブラック・ジャックでも治療不可能でしょコレは。ピノちゃんも真つ青だよ。

——ブラック・ジャックは確か、外科医だったような気がするけど——

まあそれは置いてつと。

俺はこの病気——世間一般に言う【恋の病】とやらを、【スイートエンジェルシンドローム】と呼んでいる。要するに……

「里乃ちゃん好き好き大好きマジ愛してる死ぬまで一緒にいたい片時も傍を離れたくない顔が見たい声が聞きたい匂いが嗅ぎたい触れてみたい抱きしめたい見つめられたいその瞳、里乃ちゃんマジ天使！」

と、他人に聞かれたら恥ずかしすぎて顔から火が出るどころかマグマ噴き出すレベルの恥言を、本来頭を乗せるだけの枕を抱き枕みたいにギュッと抱きしめベッドの上で二転三転しながら叫ぶなどの滑稽なピエロもドン引きな奇行をとってしまふ病気である。

『だって！仕方ないじゃない！思春期だもの！』

とは、発作が治まり冷静になった後で、このような奇行をしていたことを思い出し、穴があつたら墓穴にしたいほど恥ずかしくなつたときに唱える呪文だ。効能は自己の正当化。

——夜、寝る前にベッドの上で発病することが多いんだよね、この病気。

里乃ちゃんのが頭から離れなくなつて…あらぬ妄想もしばしば。

あらぬ妄想に関しては、自主規制つてことでどうぞよろしく。

「メールしようかな？ どうしよう？ 迷惑じゃないかな？ いやいやいや、それよりもまず、メールするような内容あるのか？」

好きな女の子にメールするかしないかで、ふだんあまり使わない頭をフル回転させている。

ここで使わない頭なら、腐つて落つこちてしまえばいいさ。

ああだがしかし、悩む、躊躇う、踏み出せない……

こんな風にウジウジしちゃうのが、俺の悪い癖なんですよね。

——おつかしーな。中学の頃はもっと軽く、積極的に女の子にアプローチしていたのに。

昔の恋は本気じゃなかったってことなのかい？ まあ、あながち嘘じゃないと思うけど。

中学の頃の俺の女性遍歴は、あまり誇れるようなものじゃない。

告白した人数は5人、告白された人数は0人、交際した人数は2人。自分の見た目にまったく自信がないのかと言えば嘘になるが、いくら待っていても告白してくる女の子は皆無だった。

二人ほど告白にOKを貰えたのはよかったが、こちらら部活熱中少年だったもので——

釣った魚に餌を与えなかったのが災いし、二人とも一ヶ月経たずに破局。もちろん、フラれたのは俺のほうであることは言うまでもない。

——所詮中学生の恋なんて、お遊びでしょ？ だつてよく考えてみてよ。中学生の頃からのカップルが結婚したとか、そんな話実際みんな聞かないでしょ！ そう！ 中学生の恋愛なんて疑似恋愛！ 将来大人になったときに意中の異性と上手くお付き合いするための、練習…そう、練習みたいなもの！

もしくは青春のページを華やかに彩るための絵の具！

未来へと継続していかない、期限付きの不毛な関係なのだよ！

ドゥーユーアンダースタン？

——それに高校生の恋愛だって、中学の恋愛の延長のようなもの
だろ！ 近い内にいつかは別れがくることわかりきってるじゃん！
だったら、高校入ったら適当な女の子見つけてお付き合いして、
大人になって本気の恋愛をするときに困らないための訓練と、『彼
女がいる高校生活を送った』という想い出作りに励んでやる！

——と意気込んでいたわけだけれども……

——見つけちゃったのさ。トゥルーラブを。

——こんな恋は初めてだった。胸が焼けるように痛く、だけど心
地いい。痛みと快楽が表裏一体の、不思議な感覚。

その感覚を今日も、俺はベッドの上で味わっている。

「メールの内容かあ……」

——さて、メールを送るとしたらどんな内容にしようか。

——里乃ちゃんと俺は、同じバンドのミュージシャン。下心がバ
レないような内容なら、音楽の話題が好ましいだろう。とすると……
「そうだ、アレ、聞いてみようかな」

——思い浮かんだ。よし、早速メールしてみよう。

里乃ちゃんにメールを送るべく、俺はケータイの新規メール作成
画面を開き、世話しくボタンを押し始めた。

ギターとメールと。（後書き）

〔用語集〕

・【レトロ】

【Magnolia】が3番目に完成させた曲。 作詞：館腰ひのき 作曲：名取修

自分が上手くいかないのを周りのせいにし、世界に嫌われている
と思い込んでいたひのきの経験を表現した曲。 歌詞が
先に作られ、それに合わせるように修が作曲した。

・【川内サノスケ】

4人組ロックバンド、【オリオン】のギタリスト。オールラウンドに卓越したギターテクと、圧倒的なステージパフォーマンスは同業者の間でも評価が高く、音楽雑誌で定期的にギターの練習方法を綴ったコラムを掲載している。新世代のギターヒーローとして高い期待が寄せられている。

・【スウィートエンジェルシンドローム】

世間一般に言う恋の病。ただし、ひのきが里乃ちゃんに抱く恋心
の場合のみを指す造語。

世界を変えよう。

「宛先」

里乃ちゃん

「件名」

聞きたいことがあります！

「本文」

夜遅くにごめんね（^^）；

変な質問しちゃうけど……

『音楽で世界を、変えられると思いますか？』

いや〜

今日友達とその話題で盛り上がったちゃってさ（笑）

同じバンドのメンバーの意見が聞いてみたくなって（^^）／

あんま深く考えないでいいから、どうぞよろしく！

……こんな文章でいいのか？

センスなくなっちゃった？

20分ほど考えて作ったんだが……

——ま、いつか。とりあえずこれで送ってみよう。

うだうだ迷っていたら、お日さん昇っちゃうつーの。

俺は半ば自棄になった気持ちで、メールの送信ボタンを押した。

——実際、この話題で里乃ちゃんと話してみたい気持ちはあった。ちよつとカッコつけの、青臭い話題ではあるが。

音楽の可能性を模索するギタリスト——はは、なかなかカッコイイかも。

こんな風に、軽く自分に酔ってみたりもする。

——15分ほど過ぎ、里乃ちゃんから返信がきた。

キタキタキタ！ 里乃ちゃんから！

……やばい緊張する。たかがメールなのに……

「落ち着け、落ち着け俺よ……」

大きく一回息を吸い込んで、ゆっくり吐き出す。

——よし、メールを開こう。

「送信者」

里乃ちゃん

「件名」

Re：

「本文」

いかにも若者ミュージシャンって感じの話題ですね（*^o^*）

じつは私も、よくそんなことを考えたりするんですよ（^^）v

私の持論なんですけど

一生懸命作った音楽は、まず身近な人…

その曲を聞いてくれた人の、心を変えてくれたり、勇気や元氣を与えてくれたりすると思うんです。

そうやって影響を受けた人達がどんどん増えていくと、世界は変わるんじゃないかって（^^）v

私たちにそんな大それたことはできなくても

私たちの音楽で

身近な人達の心は動かせると思うんです（^-^ゞ

音楽で世界を変えられるとは限らないから

その音楽を聞いてくれた人の、心の世界を変えるようにしよう
って思ったりしてます（笑）

強烈な目薬を注したときのように、はっと目が醒めた。

——— そうか。俺がやりたかったのは、こういうことかも知れない。

さっすが、マイスウィートエンジェエル！

……俺より年下なのに、自分の答えをしっかりと持っているなんてさ。

自分がこれからすべきことが、霞みが掛かっているけれど、ぼんやりと見えてきたような気がした。

手を伸ばせば掴めそうで、掴めない。だが、ジャンプすれば届きそうだった。

それなら、跳ぶしかない。

「サンキュー、里乃ちゃん」

里乃ちゃんにお礼のメールを送り、俺は地下の音楽練習部屋へ向かった。

あれから一週間後――

相変わらずの真夏日。

学校はとくに終わり午後5時を過ぎているにも関わらず、陽射しが容赦なく照り付けている。弦を押さえる左手にも、ピックを握る右手にも、じんわりと汗が滲んでいた。

八王子駅北口のロータリー、バス停乗り場へと降りるエレベーターの近くの地面に腰を降ろし、俺は【レトロ】を弾き語りしていた。アコースティックギターのコードに乗せて、心の底から叫ぶように歌う。

【Magnolia】に加入してからは路上で弾き語りなどしてないので、実に一年ぶりの試みだ。

八王子駅は常に、人の出入りが激しい駅だ。何人もの人々が俺の前を世話しなく歩いているのだが、歌い始めた頃は誰も見向きしてくれなかった。

しかし、1番のサビに入る頃に一人、サビが終わりイントロに差し掛かると一人、イントロを終えAメロを歌い出すとまた一人……と、徐々に俺の前に立つ観客が――

――観客なんて大袈裟かな。少し気になったから眺めてるだけ、そんなものか――

とにかく、人は増えてきていた。

しかしながら、ほとんどの人は一瞬立ち止まってはすぐに去っていく。そして次の人が立ち止まり、10秒もしないうちに行ってしまう。その繰り返しだ。今歌ってる曲を最後まで見てくれそんな人は、3人ほどしかない。

——分かってんよ。路上ライブで人を集めて大盛況、なんて上手くいく人はほんの一握り。八王子駅のロータリーで弾き語りしている人を何人も見てきたし、俺自身もかつてやったことがあるから知ってるっつーの。

けど……

構わない。届けるんだ、俺の歌詞を——

俺が、伝えたいことを。

大それたことは、しないでいい。

聴いてくれている人の、世界を変えるんだ——

汗がだらだらと頬を伝うが、まったく気にかげずに俺は歌い続けた。

——もともと音楽なんて、『やってればなんかカッコ良さそうだな』なんて軽い気持ちで始めたものだったな。音を奏でたいという欲求よりも、カッコイイ自分を誰かに見せたいという欲求のほうが、当初は大きかった。

『へえー。俺んちつて、アコースティックギターが持ってたんだー。父さん、弾かしてくれよ』

『ギターって案外面白いじゃん。ところでコードって何んだ？』

『弾き語り？ コレがあればそんなのができるんだ——』

『バンドかぁ…… かつこ良さそうじゃん！ ——どうせやりたいことがあるわけじゃないし、組んでみようかな——』

『っーか誰と組めば良いんだよ……。こんななら軽音部ある高校受けとけば良かったなあ——』

『…… よし、決めた！ 俺にはこのアコギと、持って生まれたこの歌声があれば良い！ …… 路上で弾き語りだ！』

『バンド組まないか、だって？ …… まさか見ず知らずの人から言われるなんて……。もちろんOKに決まってるじゃん！』

楽器を始める人なんて、みんな案外俺と同じで、きっかけは些細なことかも知れない。初めから、『俺はプロになる』って決意して楽器手に取る人は、はたしてどれだけいるのだろうか。

—— 始まりは適当で良い。けど、俺はいつまでもふわふわしてられない。そうだろ、修くん、里乃ちゃん。

【Magnolia】のメンバーでやれるところまで—— それこそ、プロになるとかCDデビューするとか—— やっていくって決めたんだろ！

—— 俺は甘かった。いつも心のどこかで、修くんや里乃ちゃんに頼っていた。『俺は二人と違って楽器歴浅いから』と、自分に言い訳していた——

【生きて。でも、忘れないで】だって、せつかく俺が作った曲なのに、メッセージ性の強い曲にしたのに——

俺は自分が本当に伝えたいことなど、一つも入れていなかった。良い歌詞がたまたま書けた、見てくれただけの中身がスカスカな曲

になった。歌い手の俺が、真に感情を込められないんだからな。
こんな俺が、いくら頑張って歌歌っても、人の心に届くはずなんてない。

——だから俺は、歌詞を書き直した。

修くんが電話で聞かせてくれた話。頭の中で何回も思い浮かべて、修くんにも何回も感情移入して、何回も悩んで何回も書き直して何回も悶えて、それでも歌詞を考え続けた。

俺の想像で書いた部分も多くある。それでもいいと思った。想像なら想像なりに、感情込めて書ければ。

そうして出来上がった歌を、何回も何回も練習した。想いを伝えられるように、修くんが認めてくれるように、一生懸命。

——パチパチパチ。

【レトロ】を歌い終わった。

俺の前で歌を聴いてくれている4人が、小さく拍手をしてくれている。

会社帰りと思われる40代くらいのサラリーマン。

同じく会社帰りだろうか、20代後半だろうスーツ姿のOL。

スタジオ練習に行く途中か、もしくは練習を終えて帰る途中かもしれない、ギターケースを背負った青年。

買い物袋を手にした、30代くらいの主婦。

みんなそれぞれ年代も風貌も異なる人達が、真っすぐに俺を見ている。

間を空けずに、【マテリアル】【影法師】と、続けて歌う。【影法師】を歌い終わる頃には、さっきの4人に茶色に染めた髪の子高生が加わり、計5人の人が耳を傾けてくれていた。

「僕の歌、聞いてくれてありがとうございます」
本当に、ありがとう。

見ず知らずの人が路上で5人も聴いてくれるなんて、俺にとつては正直感動ものだ。

「次で最後の曲です」

——次が、1番聴いてもらいたい曲なんだ。
「タイトルは」

——結局、タイトルは変えなかったな。
「生きて。でも、忘れないで」

——館腰ひのき、17才。
本気で人に、想いをぶつけます——

作者からのお知らせです。

・8月7日（日）

第1話〜第9話までの本文を、大規模編集しました。

とは言っても、第7話以外は、内容をほとんど変えていません。

当方は何分素人なもので、文章、情景描写、心情描写などがわかりにくい箇所が多々あるという指摘を受けました。ですので、読者のみなさんがよりスムーズに理解できるように、本文を加筆、訂正いたしました。

ご迷惑をお掛けして申し訳ありませんが、これからも宜しく願います。

挿絵におきましては、設定と第3話にて掲載していますが、これから随時追加していきます。

イラストは、カラさんという知り合いの女性に描いていただいております。

神ドラマーの憂鬱

ったく……

何やってんだか……

買って間もないスティック折っちまうたあ、まだまだ俺も未熟者だ。

——精神状態でプレイがこんだけ左右されてんだ。‘神ドラマー’なんていわれていようが、所詮はただの人の子なんだよ、俺だつてな……

苦虫をかみつぶしたような顔をしているであろう俺は、鳥村楽器のレジ袋を提げ、電車で帰宅するべく八王子駅構内へと向かっている。

八王子駅はなかなか大きな駅であり、俺が現在いる北口には、構内に直接続く階段1つと、弾き語りや路上ライブによく使われる広場に続く階段が2つ、つまり3ヶ所の階段がある。

俺は広場に続く階段のうちの一つを、自分の不甲斐なさを噛み締めるようにして昇っていた。

今から40分ほど前、

はるかだい

日野市にある、都立遥台高校——俺の通っている学校——からの電車帰り、本来は自宅の最寄駅である西八王子駅で降りるはずだったのだが、俺は途中の八王子駅で降りた。八王子の楽器屋でドラムスティックを買ったためである。

昨日、バイトから帰ってきて夜の10時からドラムの練習を始めたのだが、開始間もなくスティックを折ってしまったのだ。

『原因』は、わかっている——
『力みすぎ』だ、くそつ。

あの時の俺は、普段からは考えられないほど力を入れて、スティックを振るっていた。まるで、身体に纏わり付いた何かを振りほどくかのように。

基本的に、ドラムスティックは脱力して振るもの。必要以上に力を入れていればスムーズなスティック捌きは不可能なうえに、スティックにも負担が掛かってしまう。

経験を積みれば積むほど、無駄な力も動きもないドラミングができるようになっていくはずなのだが――

昨日の俺の有様は、小学生から練習してきたドラマーとは到底思えないほど無様なものだった。

じゃあ、なんだって俺は力みすぎていたのか――

『原因の原因』も、わかっている。

――『イライラしていたから』、だ。

負の感情を演奏に持ち込まないように心掛けている俺だが、ここ最近ではでんで話にならん。四六時中、イライラしっぱなしだ。物をぶち壊したくなるほどまでは感じていないが、とにかく、何も無い状態でも気がつけばイライラしている。

じゃあ、『原因の原因の原因』――なぜイライラしているのか――は？

……わかつている。

俺が、俺自信が……

弱い――

脆い、とも言えるだろうな――

そんな自分に腹が立っているからだ。

『――ごめんな。あんな歌、創っちまって』

一週間前、ひのきが持ち込んできた自作曲のことで、あいつに電話をした。ついでに、沙由^{さゆ}のことも、話せるだけ話した。

あの日から、俺の精神は均衡なバランスを保てなくなった。

沙由^{さゆ}のことを思い出し、泣きたくなる日々が続く。沙由の死を乗り越えて沙由のためにも音楽を頑張ろうと誓ったはずが、あれから4ヶ月以上も経っているのに未だに前に踏み出せていない。その事実^{じじつ}に気付かされ、自分を死ぬほど殴りたくなるのだ。

——なんであいつに、沙由^{さゆ}のこと、話そうと思ったんだっけな。説得するだけでもよかったのによ。

今さら考えても遅い。そんなことを考えるより、明日のスタジオ練習であいつに会うときにどうやっていつも通りに接するか、そっちのほう^{こちら}が重要だ。

——ったく……
気が重いぜ……

ドラムセットを丸ごと背負ったかのように、押し潰されそうだ。階段を踏み締める足どりも自然とゆっくりになる。そしてどうにか階段を昇り終えたとき——

歌が、聞こえた。

街頭で流れるような、BGMの類ではない——

マイクもスピーカーも通していない、『生の』歌声と——

アンプもエフェクターも使っていない、透明感のあるアコースティックギター^{アコースティックギター}の音色——

弾き語り、だろうか。それにしては、普段からよく聞いているよ

うな――

「――っ!? この声……ひのきじゃねえか!」

間違いない。この伸びやかな高音、感情のこもった力強い歌い方

1年以上も馴れ親しんできた、館腰ひのきの……

「あいつの声じゃねえか!」

歌が流れてくるほうへ、小走りで向かう。

なんであいつが!? 弾き語りはもうしていないって言ってたはずだが……

そしてすぐに……

見つけた。5人ほどのギャラリイの後ろで茶色のアコースティックギターを抱え、大気圏で燃え尽きようとしている星のごとく、『熱唱』している――

【Magnolia】のギター&ボーカル、館腰ひのきを。

……あいつ、いったい何を歌っているんだ?

【Magnolia】の曲じゃない……いや、コレは……!

一度だけ、聞いたことのある、あの曲。

もう二度と、聞くことはないだろうと思っていた、あの曲。

あのとき聞いたものとは大分変化してはいるが、間違いない――

の曲――

【生きて。でも、忘れないで】

偶然にも、俺と沙由の過去をなぞるような歌詞になっていた、あ

俺の全て

沙由^{さゆ}は、俺の全てだった。

腰まで伸ばした美しい黒髪も、

透き通るような白い肌も、

少し切れ長で気の強そうな目も、

拗ねたかと思えば今度は猫撫で声で甘えてくる、といった、バリ

エーションに富んだ性格も……

その全てが、狂おしいほどに愛しかった。

沙由は……

俺の全存在を懸けて守ろうと決めた、掛け替えのない――

『恋人』

――だった。

生れつき病弱だったという沙由は、俺と交際を始めた中学3年の春からすでに、家で横になっていることが多かった。たまに一緒に出かけるときも、人込みの多いとこや車の通りが多くて空気の汚れた場所は避け、河原や公園を散歩したものだ。

本人もあまり込み合ったところは好きではならしく、年頃の女子なら誰でも行きたそうな、街中のショッピング等にも興味を示さなかった。

――いや、俺にはそう見えただけで、実際はどう思っていたかはわからない。

だが、俺と一緒にいるときの沙由の心底楽しそうな笑顔には、何の偽りもなかった。

これだけは、確信を持って言える。

そんな沙由だが、自分から一力所だけ、苦手なはずのある場所に行きたいと、よく言っていた。

——ライブハウスだ。

沙由は音楽が好きだった。俺が勧めたのも、そうじゃないのも、よく聴いていた。音楽がきっかけで俺と知り合ったというくらい、音楽の話題について話すのが好きだった。

昔俺がいたバンドや今俺がいる【Magnolia】の音源を聴かせると、興奮したように喜んでくれた。

生でライブを見たいと毎日のようにせがまれたが、あんなタバコの煙にまみれ人口密度が高く窓もない空間に、沙由を連れていけるわけがない。

断る度に見せる拗ねた表情は……

その——

可愛かった——

のだが、何か代わりに埋め合わせをしなきゃと、いつもそういう気持ちにさせられた。

だから、そういうときはだいたい、沙由が満足するまで、自分のふとももや雑誌をスネアやタム代わりに、沙由に見せるためだけに練習したスティック捌きを見せてやったり、ギターで沙由のその日聞きたい歌を弾き語りしてやるのだった。

それが俺の1番の楽しみでもあったことは、口には出さなかったが沙由も気付いてくれていたようだ。

高校1年の12月——

沙由は入院した。退院のメドがない、長期入院だ。

病院での度重なる検査にも、沙由は耐えた。検査の前には、【Magnolia】の曲や、俺が弾き語りした歌を録音したやつなど

を聞いて、勇気を出していたという。

バイトや練習の時間を削り、沙由の見舞いには毎日行った。時間がなくて10分しか会えないときも、だ。家計のこともあり、バイトは辞めるわけにも行かなかったので、バンド練習や自主練習の時間はよく潰れた。

——【Magnolia】のメンバーには、すまないことをしたと思っている。事情はほとんど説明しなかったが、あの二人は詳しく問い詰めるようなことはせず、どうしようもない事情があるのだからと察してくれ、練習にしばらく参加できないことを受け入れてくれた。

俺の夢——将来音楽で成功すること——を知っていた沙由は、余り無理して見舞いにくるのではなく、もっともつと音楽を練習して、夢を追い掛けて、良い曲をたくさんを創って欲しいのだと、よく言っていた。

——自分が俺の足枷になっているとしても、思っていたのだろうか。
——沙由がいたから、俺は頑張ってこれたのに。

沙由に残された時間があまり長くないと知っていた俺は——

『心配するな。退院したら、ライブハウス借り切って観客は沙由だけのライブをやってやる。新曲たくさん聴かせてやるから待つとけ』

——半ば自分に言い聞かせるように、沙由に宣言していた。
貸し切る金は、働いて節約して貯めて売って……とにかく、なんとかする。

沙由のためだけのライブが実現できるなら、死んでも構わない。
だから——

思っただけ無駄だったと、最期の瞬間になるまで知るよしもなかった。

最期の時……

「俺と一緒に死んでやる！」

と泣きじゃくる俺に、小さく笑いかけ、
病床で沙由は、こう言った。

「私の分まで生きて……大好きな音楽、いつまでも頑張って……
でも、私のこと、忘れないでね」

と

世界は変わった

ひのきの、心の奥底から魂丸たましいごと搾り出してぶちまけるような熱い叫びが、鼓膜を通して俺の脳を揺さ振る。

何なんだよこれ……！

マックで聞いたときと、全然……

違うじゃねえか！

歌詞とかメロディとか、それ以前に……

『想い』が、違う。

決定的に。

無理矢理感動を誘おうとしていた、あのときの俗な想いから……
本気で人に、想いをぶつきたい。ぶつけて、感じ取って欲しい、
といった想いに――

そういった気迫が

ありありと、生々しく伝わってくる。

まるで、この広場という空間がひのきによって支配されているように――
うな――

そんな奇妙な気持ちにもさせられた。

……ひのきは、俺がいることには気付いていないようだ。しかし、
5人のギャラリーからさらに数メートル離れているところで俺が観
ているとはいえ、あいつがいつ気付いてもおかしくはないだろう。

だがしかし、俺は気付かれたくはなかった。

動揺させて、歌を中断させたくないから。

最後まで、この歌を聞いていたいから……

『消えて欲しくない ずっと一緒にいたい』

ひのきの言葉が、ダイレクトに俺の魂を穿^{うが}つ。

『俺と一緒に死んでやると わがままな愛を振り撒いてた』

目頭に熱を感じたときには、すでに涙は頬を伝っていた。

『笑って君は 最期を告げる』

——ちくしょうっ！

——もう泣かないと、決めていたはずなのに……

『生きて。でも、忘れないで ……と』

ギュッと握りしめていた拳の甲を、ゴシゴシとこすりつけるようにして、俺は涙を拭った。

～ Epilogue ～

「いや、まさか修くんが見てたなんてねー！ほんと驚いたわ」
言葉や仕草こそ明るく振る舞っているが、俺は内心の動揺をまだ抑え切れていなかった。

「俺の方こそ、だ。——お前が八王子で、弾き語りしているなんてな」

俺と修くんは、高尾方面行きの電車の座席に座っている。時刻は既に午後6時を回っていたが、車内には眩しいくらいの日光りが差し込んでいた。

——そもそも、さっきまで八王子駅前で弾き語りをしていた俺が、何で修くんと一緒に電車で帰っているのかというところ……

【生きて。でも、忘れないで】を演奏し終わった後。観客の一人だった女子高生にキヤーキヤー言われ褒め殺しにされ、モテ期キタ

——と浮かれていたとき——

数メートル先にいる、目つきの悪い二枚目——

修くんの存在に、気付いた。

……ハイ、気まずい空気の出来上がり。

……とりあえず、修くんは家に帰るところだったらしいので一緒に帰ることにした。

——という流れがあったわけです。

——あのときは超いいいいつつくりしたわ！　口から心臓飛び出るかと思っただし！

——修くんがステイック買いにたまたま八王子来ていて、その帰りに俺の演奏聞いてたなんて……

いやはや、偶然って恐ろしいものですなあ——

……っというか計算違いで計画台なしなんですけどー！

「っつーか、何で駅前で弾き語りだ？ お前最近そういうことしてねえって言ってたろ」

「……練習、しようと思っただけ。……本気で、作り直した曲だから。明日のスタジオ練で修くんに聞いてもらう前に、リハーサルしとこうと思っただけ」

「……そうか」

修くんの表情は、いつも通りムスッとしていて、感情を深く読み取れない。それでも、激しく怒ったりしているわけではないことは、言葉使いなどからなんとなくわかる。

俺が今日、八王子駅前でわざわざ明日の予行を行った理由は——実際に、人に想いを伝えるように歌っておきたかったからだ。人に聞いてもらうというのは、何も今回に限らずいい練習になるものだけでも。

「……でさ、どうだった？ あの曲……。けっこう本格的に、気合を入れて作り直したんだけどさ……」

修くんが聞いていたのは、修くんが一回ボツを出した——

修くんの過去をなぞるような歌詞の、あの曲。

俺は、修くんの心を動かすような歌を歌えていたのだろうか。本気で歌ったとはいえ、あくまで今日のは練習だったわけだし、修くんがいることを意識していたわけじゃなかったから……

「……………」

「……………」

うつっ、気まずい。

何だこの間は……

修くんは腕を組み、目を閉じて考えこんでいるようだった。

——そして永遠とも思える沈黙——実際には10秒ほど——が過ぎ……

「……良いんじゃないか。……バンドでやれるくらいの出来だったしな」

「ホント!? マジで!?!」

「つつつても、来週のライブじゃ無理だぞ。間に合わねえしな。…

…次の、8月のライブまでに完成させるか」

「うんうん! 全然オツケーだよ!! ササササンツ、キュー修くん! よっしゃー!」

「おい、うるせえぞひのき」

思わず席を立ち上がり歓喜の雄叫びをあげていた俺を、迷惑そうに注意する修くん。周りの乗客の咎めるような視線も耐え難く、すぐさま俺は席に戻った。

——認めて、くれたんだ……

嬉しかった。

俺の自作曲が初採用されたから、じゃあない。

——俺の歌が修くんの心を、少なからず捉えたらしい。

そのことが——

ただただ、嬉しいんだ。

「……あのよ」

「ん? なに?」

「……お前の歌、よかった。正直……感動した」

「そっか……。ありがとね」

修くんの世界は、多分

ちょっとだけでも、変わったのだと思う。

楽しかった思い出も、辛かった過去も受け入れて
それでも前へ歩き出せるように

——そういうメッセージを込めた、俺の歌で……

——大それたことができなくてもいい。

けど、俺の歌を聞いてくれた誰かの世界を、変えてみたいんだ。

——音楽には、それができるだけの力が、あるんだと思う。

「さうて、明日の合わせ練も、来週のライブも、とにかく頑張ろう
ぜ！ もうチケット5人分売ったからな！ けっこう苦労したんだ
ぜ！」

「甘いな。俺は10人だ」

ほんの僅かに、修くんの口元に勝ち誇ったかのような笑みが浮か
んでいた。

「な、なにー！？ バ、バカな……。これがイケメンと凡人の戦力
の差だというのか」

「イケメンいうな。俺の人脈の賜物だ」

ガタンゴトン。

電車のリズムを肌で感じながら

ずいぶん久しぶりに思える何気ない会話を

俺達は続けた。

第1章

世界を変えよう

——完——

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2562v/>

バンドと君と、ほかにも何か。

2011年8月14日03時36分発行